

解脱の宝飾 第9章 菩提心を摂受する（担当：P.162 19 行目～P.164 18 行目）

発心の因

正覚に発心することの因は、『十法経』^(訳註17)に

「四つの因によりその心は生ずることになる—

- 1) その心そのものの利得が見えるようになることと、
- 2) 如来を浄信することと、
- 3) 有情の苦が見えることと、
- 4) 善知識により正しく勧められることです。」

と説かれています。

『菩薩地』[の「発心品」]^(訳註18)にもまた、[初発心のための] 四つの因として説かれています。すなわち、「そのうち、四つの因は何かというと、

- 1) 種姓の円満は、菩薩の心が生ずる題一の因です。
- 2) 仏陀と菩薩と善知識により攝取されたことが、菩薩の心が生ずる第二の因です。
- 3) 有情たちに対する悲は、菩薩の心が生ずる第三の因です。
- 4) 輪廻の苦と難行の苦〔すなわち〕長期であり多種多様の~~のと~~ (誤植?)、強烈なものと、間断がないのをも怖れないこと

これは、菩薩の心が生ずる第四の因です。」

『莊嚴経論』には、正しく受けた仮設の発心と、勝義の発心との二つの因を、個々に説かれています。そのうち、第一は、「友の力、因の力、根本の力、聴聞の力、善の^{さくしゅう}数習から、非堅固と堅固が生起している。他者により教えられた発心を説明している。」と説かれています。

^(訳註20)「他者により教えられた発心」というのは、他者の表〔業〕から心が生ずるものそれは、「正しく受けた仮設されたもの」ともいう。世俗の菩提心です。それもまた、友の力から、〔すなわち〕善知識のほうへ生ずることがある。因の力から、〔すなわち〕種姓の力により生ずることもある。善根の力から、〔すなわち〕彼の種姓が増広したのを通じて生ずることもある。聴聞の力から、〔すなわち〕それぞれの法門を講説したなら、生ずることもある。善を〔繰り返し〕数習することから、〔すなわち〕まさに今生に常に聴聞と受持と執持などをする^(訳註21)ことから生ずることもある。それもまた、〔菩提心は〕友の力からは非堅固〔に生起し〕因などの力からは堅固に生起するのです^(訳註21)。

勝義の菩提心の因は、『莊嚴経論』^(訳註22)に、「正等覚者を喜ばせ、福德・智慧の資糧を集積し、法に無分別の智慧が生ずるから、それは勝義だと主張する。」と説かれています。

教と修行と証得の差別により生じさせられるのです。

表（表業）：表に現れた行為。他人にそれとわかる行為。*1

註20：外面に現れて認識される業をいう。

持…①戒をたもつこと。戒を侵さないよう努めること。②記憶し、忘れないこと。③忘れずに持っていること。いつも持っていること。*1

受持…教えを受け、しっかり覚えておくこと。*1

執持（しゅうじ）…しっかりとらえて、忘れないこと。よく忘れず、心に保持すること。*1

3つの経証を表にまとめてみました。

十法経	菩薩地（発心品）		莊嚴経論	
	（本文）	（註より）		
			正しく受けた仮設の発心 （他者の表業から心が生ずるもの）	勝義の発心 →以下3つから、勝義の殊勝なものを第一「歡喜」地にて得る（註22）
①その心そのものの利得が見えるようになること	①種姓	①自己	①友の力（善知識）	教（正等覚者を喜ばせ）
②如来を淨信すること	②善知識	②他者	②因の力（種姓）	修行（福德・智慧の資糧を集積し）
③有情の苦が見えること	③悲	③因	③根本（善根）の力（種姓が増広）	証得の差別（法に無分別の智慧が生ずる）
④善知識により正しく勧められること	④苦の忍受の円満	④加行	④聴聞の力	
			⑤善の教習	

〔菩提心は〕友の力からは非堅固〔に生起し〕因などの力からは堅固に生起するのです

「因などの力」とは…

ひとつは、大乘の種姓… タルゲン p86-88 参照

翻訳者ノート 24. 解脱の宝飾 p. 86 *2

大乘の種姓が他より殊更に勝れている理由

大乘の種姓が他より殊更に勝れている理由は、二種類の声聞・独覚の種姓は劣っているのです。煩惱障を淨めただけにより、正しい種姓になるからです。大乘の種姓は最上です。二障ともに淨めたので、正しい種姓になるからです。よって、その大乘の種姓は、すべての種姓よりも殊更に勝れていて無上です。

それら種姓は仏の地に対して近いことと遠いことの因を説く

そのようならば、その五つの種姓のうち、大乘の種姓が有るものは、仏の近い因です。声聞と独覚の種姓もまた最終的には仏を得るから、遠い因です。決定していない種姓は、或る者は近い因ですが、或る者は遠い因です。種姓を断った種姓もまた、長い間を意趣なさったのみことから、永久に正覚を得ないわけではないので、きわめて遠い因です。よって、有情にはそれら種姓があるからまた、有情は仏性を有するものなのです。そのように三つの因により、一切有情に仏性が有ることを説かれています。

頓悟の人、漸悟の人

G リンポチェ法話集 1 修行の道 p 101-103*³

さて頓悟と漸悟と申しましたが、ジクテン・スムゴン大師は、「頓悟はない。みな漸悟である」とおっしゃいました。なぜかという、頓悟の人は前生で修行を積んで、すでに菩提心や修行の習気を伴っていたので、導かれた瞬間に理解できるからです。前生で菩提心の修行をしていなければ、すぐには理解できません。ですから、頓悟の人も実際には一瞬で悟るわけではないというのが理由です。前生ですでに修行していたということです。

もうひとつは、慈悲の心…

G リンポチェ法話集 1 修行の道 p 85*³

慈悲にはとても強い力があります。マハームードラーの教えでは、「千劫の間に積んだ悪業も障礙も、心のありようを悟ればその瞬間に消え失せる。たったひとつの灯明で闇が消え去るように」と説かれます。その灯りが慈愛の力です。ですから私たちは、何度も何度も慈愛を思い出さなくてはなりません。菩提心は、一時的な利益の因でもあり究極的な樂の因でもありますから、何度も申します。(中略)

ジクテン・スムゴン大師は、慈愛と悲心をはっきり区別することが大切だとおっしゃいました。同じものではありません。まず慈無量心が生じ、そこから悲心が生じます。「慈悲の力をもつ者」は、先ほどお話ししたような聖なるサンガや菩薩を指しています。その人たちがとても強いのは、利他心があるからです。

さらには、不二の心…空性?…→勝義の発心?

G リンポチェ法話集 1 修行の道 p 105-³

これについてジクテン・スムゴン大師の教えがあります。智恵と心についての議論です。『解脱の宝飾』には、世俗の智恵と出世間の智恵のふたつの智恵があると述べられています。しかしジクテン・スムゴン大師は、それは違うと言われました。あるのはたったひとつです。ジクテン・スムゴン大師のお言葉は次のようです。「この世で為されたことの一切は仏が為された」。すべては同じ心です。妄分別と智恵はひとつの心です。違いはないのですが、一方は外を照らし、一方は内を向いています。外を照らすと、二元の存在を捉えて、「私と彼」、「自と他」と考えます。しかし、内側を向いて妄分別そのものを観察すると、すべての二元の思考は消え落ちます。もはや二元はなく、同じ心です。

たとえば、空っぽのコップがふたつあるとしましょう。コップの中の空性はどちらも同じです。しかし、ふたつのコップがはっきりと見えますから、ふたつあるように思います。これが輪廻の有情のものの方の見方です。コップを壊せば、もはやふたつではありません。もはやふたつの空性もありません。ふたつのコップの空性はひとつです。これと同じように心のありようを見るなら、原初の不二の智恵を知ります。ですからミラレーパは二番目に、「私は妄分別を見ない、ただ原初の智恵を見る」と言われました。

最初にミラレーパは「私は現象を見ない、ただ現象のありようを見る」と言われました。二番目には「私は妄分別を見ない、ただ原初の智慧を見る」と言われました。ミラレーパは輪廻と涅槃の一切の現象の存在にとらわれず、現れのすべてを幻とご覧になりました。一切は造作された有為で、無常で、自性を欠いています。心がすべてを作り出しています。心は原初の智慧です。心が二元の妄分別である時は、輪廻を作ります。しかし、その妄分別の本質は原初の智慧です。ですからミラレーパは「私は妄分別を見ない、ただ原初の智慧を見る」と言われました。まとめますと、二取がない時、その心を原初の智慧と呼び、二取がある時、その心を妄分別と呼びます。これをはっきり理解する必要があります。

三番目には、「私は有情を見ない、ただ仏を見る」と言われました。これは仏のお言葉、「一切有情はみな仏である」と一致します。このように決定して確信を得るのです。一切有情の心の基は仏です。これに気がつくなら、「そのとき期待と疑惑の過誤を知」ります。もはや期待はありません。なぜなら、心の基はすでに仏だと知ったからです。ゾクチェンではこれを「自性清浄」と言います。心の基は完全に清浄であるということ、これも仏のお言葉「一切有情はみな仏である。ただ一時的な汚れで曇っている」と一致します。この汚れ、「私」という概念は、降りやまぬ雨のように、何度も何度も降ってきます。これを滅するためには、今までお話ししたように、慈悲を生じさせるしかありません。そうすれば「私」という概念はなくなり、他者への関心だけが残ります。この時に氷が解けるのです。二度と凍ることはありません。ミラレーパが「私は有情を見ない、ただ仏を見る」と言われたのは、つまりミラレーパは、氷などどこにもなく、あるのはただ水だけだと気がついておられるからです。氷は水なのですから。

発心を受ける対境

菩提心それを受ける対境は、

- 1) 軌範師が有る流儀と、
- 2) ない流儀との二つです。

それもまた、その軌範師の御前に行くにあたって生命または梵行の障害が無いのなら、土地が遠距離であっても、軌範師があるのですから、その面前に行って、その対境から受けるのです。

軌範師の自相（定義）もまた、律儀を受ける儀軌に巧みであるのと、自己が律儀を得て損なわれずに住するのと、身語の表〔業〕の義を理解できるのと、財物を専らにせず悲愍により学徒を護〔りそだて〕るのです。そのようにまた『菩提道灯論』^(訳註 23)に「『菩薩地』の戒品に説かれた儀軌により、〕正しい相を具えて善き師に律儀を受けよう。律儀の儀軌に善巧であるのと自己が何らかの律儀に住していて、律儀を受ける忍、悲を具えたものを、善き師と知るべきです。」と説かれています。『菩薩地』〔の「戒品」〕^(訳註 24)にもまた、「菩薩の誓願を立てたから、法に随順する。律儀を受けている。善巧である。語の表〔業〕の義を取らえることと領解することができる〔そのような菩薩の両足に、最初に礼拝してから、祈願すべきです。〕」と説かれています。

そのような上師が近くに住しておられるが、その面前に行くには生命または梵行に障害があるのなら、「上師が無い流儀」といわれるのです。如来の像の御前において、誓願・発趣〔の菩提心〕のどれかを受ける言葉を、心底から三回唱えることにより、その誓願または発趣〔の菩提心〕を得るのです。そのようにまた『菩薩地』〔の「戒品」〕^(訳註 25)に、「もしそれら功德を具えている人が無いなら、菩薩は如来の像の面前において、自らが菩薩の戒律儀を正しく受けるべきです。」と説かれています。

上師と仏像との両者を得ないなら、面前の虚空に諸仏と諸菩薩を現前に修習してから、誓願または発趣の儀軌を三回述べることにより得るのです。そのようにまた『集学論』^(訳註 28)に、「またそのような善知識が無いのなら、十方におられる諸菩薩を現前に修習してから、律儀を自己の力に適用して受けるのです。」と説かれています。

上師に会いに行けるならば、会いに行き礼拝すべし。会いに行けないなら、仏像に礼拝すべし。上師と仏像と両方がないなら、諸仏諸菩薩を観想して礼拝すべし。ということでしょうか。

そのような菩薩の両足に、最初に礼拝してから、祈願すべきです。

D リンポチェが G リンポチェと京都の宿で再会されたとき…

菩提心を受ける儀軌

菩提心それを受ける儀軌は、上師・賢者たちの伝承した口訣には異なった多くの方法が見られます。そのように見られるけれども、ここには、

- 1) 聖者マンジュシュリーから軌範師ナーガールジュナに伝承されてきた軌範師シャーンティーヴァ流儀と、
 - 2) 聖者マイトレーヤから軌範師アサンガに伝承されてきた主尊セルリンパの流儀^(訳註 27)
- との〔、合計〕二つとして知るべきです。

翻訳者ノート 10. 解脱の宝飾 p. 81-01*²

文殊菩薩に関連して、すこし余談をします。カギュー派は、遡ると、3つの系譜からできています。すなわち、
1) 持金剛(Vajradhara どるじえちゃん)→ティローパ→ナーローパ→マルパ→ミラレーパ→ガムポパと相続された「祝福の瞑想の系譜」と、

2) 釈迦牟尼仏→文殊菩薩(マンジュシュリー)→ナーガールジュナ→アーリヤデーヴァ→アティーシャ→ガムポパと相続された「深い識見の系譜」と、

3) 釈迦牟尼仏→弥勒菩薩(マイトレーヤ)→アサンガ→ヴァスバンドウ→アティーシャ→ガムポパと相続された「広大な実践の系譜」と、の3つです[註]。

文殊菩薩への帰敬偈ではじまる(→p81 序「聖者マンジュシュリー童子に帰命します。」)ということは、このうち第2番目の系譜に属するものであることを示しているのかもしれませんが。

この3つの系譜は伝説的ないし神話的なものですが、ある程度は史実を反映しています。まず、2番目の、釈迦牟尼仏からナーガールジュナを通る系譜は、中観派の流れを意味しています。文殊菩薩が入っているのは、釈迦牟尼仏は上座仏教をマハーカーシャパに伝え、大乘仏教を文殊菩薩に伝えたという伝説があるからです。「深い識見の系譜」と呼ばれるのは、カギュー派にかぎらず、チベット仏教は理論的にはインド中観派に負うところが大きいからだと思います。

3番目の、弥勒菩薩を経由するルートは、唯識派の流れを意味しています。唯識派は瑜伽行派とも呼ばれて、瞑想実践を重視しましたので、「広大な実践の系譜」と呼ばれるのでしょう。チベット仏教は、理論的には中観派を採用しましたが、瞑想法は唯識派からたくさんを学びました。

1番目の「祝福の瞑想の系譜」にアティシャ大師が入っていないことに注目してほしいのですが、これは和訳本の 13 ページに事情が少し書かれています。

アティシャの教えはドムトン・ギャルウェージュンネーに継承されたが、ドムトンはアティシャが秘密真言、特に無上瑜伽の『ドーハー』などを教えようとしたとき、チベット人たちによる誤解を怖れて、それを制止したように、秘密真言は誰にでも教えるべきでなく、優れた場所、時、人が必要であるとして、慎重であった。

アティシャ大師その人は、そのすこし前に書かれているように、「祝福の瞑想の系譜」、すなわち「母タントラや『ドーハー藏』など「俱生乗」に特に精通していたとされるように、「大印契」にも関係が深かった」ようですが、弟子たちに伝えなかったのです。

ガムポパ大師は、アティシャ大師の系譜で学んでおられたのですが、「祝福の瞑想の系譜」を受けなければ解脱できないと考えられて、僧院を出て、在家の成就者であったミラレーパ大師の弟子になりました。その話はもうすこし先で取りあげようと思いますが、お急ぎの方は、和訳本の 23 ページ以下に詳しく書かれていますので読んでください。

余談はこれまでにして、『解脱の宝飾』の帰敬偈が文殊菩薩に捧げられているのは、第2の「深い識見の系譜」を受け継いでいるという意味にも理解できますし、実際、本書の内容はその系譜ともっとも関係が深いと思います。(もっとも、論書は文殊菩薩への帰敬偈で始まるものなのだという話も聞いたような気がしますので、本当のところは私にはわかりません)。

*1 石田瑞麿「例文 仏教語大辞典」小学館

*2 野田俊作「日本ガルチェン協会 HP 翻訳者ノート」

*3 ガルチェン・リンポチェ法話集 1 修行の道 日本ガルチェン協会